

視点

2011年3月11日。東日

本大地震が発生した時刻に、私は園長を務める保育園（現

在はこども園）の園バスの運転席に座っていました。子どもたちと園外保育に出掛け、戻ったばかりだったので。

園は地震予知の警報をアナウンスするシステムを導入しており、そのアナウンスを聞いた保育者が「地震が来るわよー！」と園舎から飛び出してきました。その直後、バスは大揺れし、バスから降り始めていた子どもたちも、園舎の中にいた子どもたちもとても怖い思いをしました。

園外保育に出掛けていたもう一つのグループは、電車で帰ってくる途中で地震に遭遇しました。緊急停止した車内にいるという一報は入りましたが、その後、連絡は途絶えました。私は限られた情報を頼りに、電車が止まっていると思われる場所まで園バスで向かいました。園外保育の時に使用しているトランシーバーが何とかながり、付き添いの保育者と連絡を取り合っており、子どもたちの元にたどり着くことができました。

地震が発生したのは金曜日の午後でした。直後に、心配した保護者が園に集まってきました。暗くなり始めた頃に青ざめた顔で子どもを迎えに来た保護者もいました。私た

ちはそんな保護者に、すぐ帰らなくていいから園で気持ち落ち着けて帰宅するよう促したりしました。

計画停電の影響で、私の住む前橋市では週明けの月曜日



前橋市柏倉町

深町

穰

県保育協議会会長、赤城育心こども園園長

子どもと家庭支え抜く

を提供しました。ライフライン、あるいは社会のインフラとして子どもたちを預かり、守るという使命を果たし続けたのです。

新型コロナウイルス感染症の流行に対しても基本姿勢は変わりません。昨年春の緊急事態宣言下でも、私たちは園を開け続けてきました。一時的には家庭で保育をすることが可能でも、多くの園児の家庭は、園を利用して生活が成り立っているのです。

園で運営している未就園の親子のための子育て支援センターは、緊急事態宣言が出された直後に臨時閉館しましたが、集う場所を失った親子が家庭内で困っているという情報を得て、利用者を制限しながらもすぐに再開に踏み切りました。

今、保育の現場では人材不足が大きな課題になっています。しかし、こうした緊急の事態に社会のために貢献したり、心の居場所を失った親子を支えたりできることに、私は大きな充実感を抱いています。

国は賃金面などを含め、少しずつ処遇改善の対策を取り始めています。志を持った皆さん、ぜひ、私たちの仲間になりませんか！

から、小学校などで給食を中止しました。一方、私の園では地震翌日も希望するご家庭のお子さんには通常の保育を行い、途切れることなく給食

【略歴】2003年から

園長。19年、県保育協議

会会長に就任。いち早く

こども園運営に乗り出し

たほか、地域子育て支援

センターの運営に関わ

る。上智大学法学部卒。